

初年次セミナーのあり方に関する アンケート調査報告書



平成27年3月24日
教育推進・学生支援機構
学修支援部門・初年次教育担当会議

目 次

1. はじめに	1
2. 調査の目的	2
3. 調査方法	3
4. 調査結果	5
1) 教育学部における調査結果	5
2) 地域科学部における調査結果	9
3) 医学部における調査結果	11
4) 工学部における調査結果	12
5) 応用生物科学部における調査結果	14
6) 全体の集計結果	17
5. 今後の初年次セミナーのあり方について	19
1) 初年次セミナーの理念・目的について	19
2) 高大転換教育科目としての授業内容について	19
3) その他	20
6. 参考資料	21
7. おわりに	30

1. はじめに

平成24年度以前は、新入生を対象にした授業科目として「教養セミナー」、「フレッシュ・セミナー」、あるいは「新入生セミナー」等の名称の授業が各学部において開講されていた。しかし、平成24年度からは、「初年次セミナー」の名称で全学共通教育科目として開講されることになり、現在に至っている。この変更は、大学として全学体制で初年次教育に取り組むため、教養教育を改革する一環として実施された。

現行の初年次セミナーでは、図書館ツアーおよび保健管理指導に関する項目については全学でほぼ共通の内容を実施している。しかし、それ以外の講義内容については各学部で企画し実施している状況であり、学部独自の授業内容が定着しつつある。当初は、大学の学習に必要な基本的事項を教授する高大転換教育科目とすることが全学共通教育科目にする目的であった。25年度には、旧教養教育推進センター・調査研究部門の主催により初年次セミナーに関するFD研究会（「大学初年次の共通教育と学修支援」、平成25年7月31日開催、参考資料1）およびワークショップ（「初年次教育の共通性を探る」、平成25年10月23日開催、参考資料2）が開催され、各学部で実施しているセミナーの内容が紹介されるとともに、初年次セミナーにふさわしい授業内容について議論されている。また、同センターでは、初年次セミナーで取り上げることが望ましい講義内容として別紙（「初年次セミナー授業計画案」、参考資料3）のような講義内容案を出している。この案では、学部にとらわれない共通性の高い項目について10回分の授業計画案が提案されている。

学修支援部門・初年次教育担当会議では、今年度に「初年次セミナー」のあり方を検討するに当たり、上述したセミナー案のような講義内容を現行の授業に組み込むことが可能かどうか、より良いセミナーにするためにはどのような内容が適切か、また、現行のセミナーの問題点は何か、各学部で実際にセミナーを担当されている先生方のご意見を伺うこととした。そこで、本アンケート調査を企画し、その結果に基づいて今後のセミナーのあり方について議論を進めることとした。

学修支援部門・初年次教育担当会議

2. 調査の目的

全学共通教育科目として開講されている「初年次セミナー」のあり方について検討するため、旧教養教育推進センターから提案された講義内容案を現行の授業に組み込むことが可能かどうか調査するとともに、より良いセミナーにするためにはどのような授業内容を実施するのが適切か、各学部の授業担当者、あるいはコーディネーターの先生方に以下の内容についてアンケート調査を実施し、今後のセミナーのあり方について議論するための基礎情報を得ることとした。調査内容は以下の四項目とした。

アンケート調査依頼内容：

- ① 現行のセミナーで別紙（「初年次セミナー授業計画案」、参考資料3）の講義内容案をすでに実施しているかどうか。もし、今後これらの講義内容を初年次セミナーに取り入れる場合、それぞれの授業項目はどれ位の重要度か。
- ② 別紙の講義内容案を現行の初年次セミナーに取り入れることは可能か、可能であれば何項目までか。
- ③ その他に初年次セミナーに取り入れるべき内容があるか。
- ④ その他意見・要望について

3. 調査方法

各学部のセミナー担当者、あるいはコーディネーターの先生方にアンケート用紙（下記参照）を送付し、回答を依頼した。現行の初年次セミナーにおいて参考資料3で示した講義内容案の各授業項目を取り入れているかどうか、またそれぞれの項目はどの程度の重要度か、という質問項目では、旧教養教育推進センターにより提案された10項目に加え、「文献調査の仕方」の項目を加えた。これは、初年次教育担当会議にて協議した結果、今後取り入れることが望ましいと思われた項目である。

授業項目の重要度については、「ぜひ取り入れるべき」、「取り入れることが望ましい」、「必ずしも取り入れる必要はない」および「取り入れる必要はまったくない」の四段階の選択肢を設定した。

初年次セミナーのあり方に関する調査回答書

初年次セミナーを担当されている先生は、以下の質問項目にご回答ください。なお、複数で担当されている場合には、コーディネーターの先生が代表でご回答ください。

学部 _____ 学科 _____
 記入者 _____

- Q1. 以下の講義内容を現行のセミナーですでに取り入れている場合には、その項目に○を記入していただくとともに、どの程度の重要度か、各講義内容について該当する欄に○をご記入ください。現行のセミナーで実施していない項目については重要度のみご回答ください。

講義内容	現行のセミナーで既に実施している	重要度			
		ぜひ取り入れるべき	取り入れることが望ましい	必ずしも取る必要はない	取り入れる必要は全くない
健康管理について					
図書館の使い方					
キャンパス・ガイド					
防災・危機管理について					
本の読み方					
大学で勉強する方法					
レポートの書き方					
英語の学び方					
発表の仕方					
岐阜について学ぼう					
文献調査の仕方					

Q 2. 上記の授業計画案を現在実施しているセミナーに組み入れることは可能でしょうか
(以下の該当する番号に○を付けてください)。

1. 可能
2. 条件付きで可能
(条件: _____)
3. 無理
4. その他

Q 3. 可能と回答した方にお尋ねします。授業項目はいくつ位まで組み入れ可能でしょうか。

Q 4. 上記の授業項目案以外に初年次セミナーに取り入れるべき共通性の高い内容があれば具体的にご記入ください。

Q 5. その他初年次セミナーに関するご意見、ご要望等があれば、自由に記載してください。

4. 調査結果

以下に各学部からの回答を集計した結果、ならびに各質問項目に対する意見等を集約して示した。また、Q1については全学部で集計した結果を最後に示した。

1) 教育学部における調査結果

教育学部では、16名の担当者に調査を依頼し、13名より回答を得た(回答率:81.3%)。以下に回答結果を示す。

Q1. 現行のセミナーで以下の講義内容を取り入れているかどうか、各講義内容はどの程度の重要度か。

講義内容	現行のセミナーで既に実施している	重要度			
		ぜひ取り入れるべき	取り入れることが望ましい	必ずしも取り入れる必要はない	取り入れる必要は全くない
健康管理について	8	3	5	2	
図書館の使い方	9	4	5	1	
キャンパス・ガイド	4	1	4	3	1
防災・危機管理について		3	3	4	1
本の読み方	5	4	1	4	
大学で勉強する方法	8	6		2	
レポートの書き方	7	6		2	
英語の学び方	1	3	2	4	2
発表の仕方	5	3	3	2	
岐阜について学ぼう	3	1	4	6	1
文献調査の仕方	5	5	2	3	

Q2. 授業計画案を現在実施しているセミナーに組み入れることが可能かどうか。

1. 可能：3件
2. 条件付きで可能：8件

条件：

- ・講座独自の内容の実施に支障を来さない程度で
- ・1コマで複数の内容を扱うのが可能であれば。
- ・講座独自で行うのは可能である。全学での講義として行われる場合には、これまで講座で行ってきた内容を大幅に削ることになるので、それは避けたい。
- ・現行の健康管理と防災・危機管理は一体にできると思われる。それと現行の図書館利用法(※1)
- ・オムニバスで担当しているので、その人員を減らせばよい。ただし、国語教育

講座のスタッフ全員が1コマずつ担当することで、学生との連携を密にする意味もある講義展開なので、実際には「無理」なのかもしれない)

- ・セミナーの単位数、授業時間を増やすことが可能でしたら
- ・(Q1で「取り入れることが望ましい」とした項目①②④について) 講座単位ではなく、より大きな単位で、専門職員によるガイダンスをしていただくことが望ましい(※2)
- ・初年次セミナーとはそもそも何なのかということに関わってくるが、大学での勉強の仕方とキャンパスライフの説明とを同時に行うには時間が不足している。すべての項目を行うのは時間的に難しい。

3. 無理：2件

- ・すでに健康と図書館はとり入れているので、それで十分です。講義の中ですでにしているのでこれまでの方法を踏襲したいです。
- ・(Q1で「必ずしも取り入れる必要はない」とした項目③⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪について) こうした画一的な内容を、講座単位で、しかも各項目に関して専門家でない教員が担当することには無理がある。また講座ごと、学部ごとに内容や方向性に違いが生じてしまい、結局のところ本来の趣旨であるはずの教育内容の統一もはかることができないと思われる。仮に左の項目を真剣に取り入れるのであれば、講座ごとではなくより大きな(たとえば学部など)単位で、各テーマを専門とする教員が担当しなければ、授業の質、統一性ともに確保できないはずである。たとえば「英語の学び方」などは、全教の英語教育の導入部分で扱うべき内容と思われる。以上のことから、社会科教育講座としては、このような項目を主体として初年次セミナーを実施することには反対である。ただし、今後これらをどうしても現行のセミナーに組み込まなければならないのであれば、社会科内の分野ごとの違い(それによって本の読み方や発表の仕方なども当然異なる)を考えて、従来の初年次セミナーで行っている入門講義・演習の中にその要素を適宜組み入れる(ただし、その内容や時間、組み入れ方は担当者ないし研究室の裁量にゆだねる)形にしていきたい。

4. その他

特になし

Q3. 可能な場合、授業項目はいくつ位まで組み入れ可能か。

- ・6つくらい
- ・現在の健康管理と図書館利用に加えて、あと2つは可能だと思います。
- ・上述の「2. 条件・・・」に記載(※1)
- ・現行に加えて、レポートの書き方。
- ・すべて組み入れ可能
- ・9~10
- ・上記の通り(※2)
- ・大学での勉強の仕方に絞って初年次セミナーを計画した場合、次の項目で構成することが可能だと思います。

大学で勉強する方法>本の読み方>図書館の使い方>文献調査の仕方、大学で勉強する方法>レポートの書き方>発表の仕方、英語の学び方

Q 4. 上記の授業項目案以外にセミナーに取り入れるべき共通性の高い内容。

- ・大学生活を行なうにあたっての、公共心・マナーを養う講座。
- ・キャリアプランについて。卒業後の人生設計を考えるための進路情報、大学生生活の過ごし方等の最低限の教育（学部特徴的な進路だけでなく、異なる進路に変更する場合の準備等も含む）
- ・6項目目の「大学で勉強する方法」という内容が抽象的で答えにくいです。「図書館の使い方」「本の読み方」「レポートの書き方」などすべてにわたって関わってくるからです。また、共通性も大切ですが、大学に入ってくる学生のレベルは様々なので、その学部や学科で必要とされる基礎知識・基礎技能などを一定のレベルに引き上げるリメディアルも必要です。

Q 5. その他初年次セミナーに関する意見、要望等。

- ・基本的なところは同じであると思いますが、学部や学科によって必要なこともあるので、自由度のある講義として残して欲しい。現在、家政学の内容を勉強しながら、多くの項目は実践しているので、単なる本の読み方や英語の勉強の仕方等は意味があまりなく、学生には身近なものとならないと思っています。
- ・当講座では、担当教員以外の講座（研究室）の教員との交流や円滑なコミュニケーションの場を設定することを重視しているので、そのような講座独自の企画が実施できるように配慮してほしい。
- ・英語の学び方は、4年の卒業研究で取り入れており、現実的な目的もなしに1年次に実施する必要はありません。まず日本語で、学び方、発表の仕方、レポートのまとめ方などをしっかり学習してもらうのがベストです。その際に、一つのテーマに取り組むことが不可欠であり、その目的もなしに「学び方」などを一般的に講義しても効果は全く期待できません。物理では、1年次の初年次セミナーに加えて、必須の物理学実験およびコンピュータ処理で、上記Q 1.に記載した内容を教育しています。

物理の1年生は、高校までの学習が「暗記」を中心としてきた者がほとんどあるため、数学を駆使して「考える」習慣をつけるように彼らを教育しています。これを成功させるには、初年次セミナーの時間を現在の2コマを超えて減少させないことが不可欠です。

- ・上記の授業計画を見て、初年次セミナーの位置づけを理解しました。これを参考にして、来年度以降の授業計画に役立てようと思います。現行では、高校理科（地学）の復習と実習を主体として行っていました。
- ・初年次セミナーは、学生と教員の相互理解、相互信頼、大学教育への導入の点で、きわめて重要だと実感しています。
- ・今回のアンケートでは、全学で共通した内容をめざしたものと拝している。それは大変結構であるが、学部ごとに必要な内容は異なってくるはずであり、す

でにそのような線で実行している部分も少なくないので、学部ごとの自由度は確保してほしい。(たとえば、教育学部の場合、すでに外国語(英語)については単位数半減化により、卒業必要時間数は倍増している。これ以上、英語のために時間はとられたくないというのが多くの教員の本音だと思う。できることなら、以前の状態に戻し、その分、専門分野の教育に時間を割いていきたい。学部ごとに英語の必要度は異なるはずだから、一律に導入されるのはいかがなものか。そうした点も踏まえただければ幸いである)

重要かつ喫緊な内容については、具体的に言及してくださると助かります。あまりに細々したものを羅列されても困りますが、たとえばAEDの使用法などが、重要かつ喫緊なものの一つだと思います。これは、「健康管理」に位置付けているのか、「防災・危機管理」に位置付けているのか(あるいは両方か、まったく位置付けられていないのか)、等。

図書館ツアーについては、以前より国語教育講座独自に行なっています。今年度は試行的に図書館員によるツアーをお願いしましたが、やはり国語教育としては不十分なので、もう一度、独自に行ないました。したがって、図書館員によるツアーは、不要とまでは言いませんが、国語教育にとっては必ずしも適合したものとは言い切れません。なので、「図書館司書、SAによる図書館ツアー」と記されてしまうと、学生にとってはそうしないと不安があるので、記さなくてもよいかと思います。ただし、国語教育のスタッフの考えているポイントと、図書館員のポイントは異なると思います。そこで、図書館員の方から「これだけは伝えたいポイント」を知らせていただければと思います。(HPなどでも、より分かりやすく提示されていればと思います)

- ・初年次セミナーというものによって変わってから、まだ年数も経っておらず、変更ありきのアンケートが配布されること自体が理解できません。やっと、教員たちの中で初年次セミナーの方向性がかたまりつつある状況です。よって、アンケートに関する返答は、いたしません。我々の返答は、現在の初年次セミナーの形式を数年間は継続する、です。
- ・Q4と関連しますが、大学入学後すぐに最低限のキャリアプラン教育を行い、卒業後の進路について意識付けをしておくことが必要ではないかと考えております。
- ・現行の初年次セミナーは、講座・研究室の紹介および関連する分野の入門講義・演習が行われる授業として、講座の初年次教育にきわめて重要な役割を果たしています。この役割は今後もぜひ残していただきたいです。また、上にも書きましたが、初年次セミナーが講座ごとに行われ(しかも社会科の場合には含まれる分野が実に多様です)、担当する教員も各分野の専門家であるにもかかわらず、そこで左の項目のような画一的な内容が求められることに対して、大きな疑問を抱かざるをえません。
- ・Q2でも書いたように、初年次セミナーの位置づけが混乱しているように思います。大学生活をスタートするにあたって必要なことを学ぶ、という目的は同じでも、それを勉強の仕方と生活の仕方の二つに分けてしまうことに無理がある

と思います。健康管理、キャンパス・ガイド、防災・危機管理については、初年次セミナーでなくても一斉ガイダンスで行える内容ではないかと思います。また、この3つに関しては、担当教員の意識の違いでかなり違いがあることも予想されます。

2) 地域科学部における調査結果

地域科学部では、8名の担当者に調査を依頼し、7名より回答を得た(回答率:87.5%)。以下に回答結果を示す。

Q1. 現行のセミナーで以下の講義内容を取り入れているかどうか、各講義内容はどの程度の重要度か。

講義内容	現行のセミナーで既に実施している	重要度			
		ぜひ取り入れるべき	取り入れることが望ましい	必ずしも取り入れる必要はない	取り入れる必要は全くない
健康管理について	1		1	6	
図書館の使い方	4	1	3		
キャンパス・ガイド				6	1
防災・危機管理について	2			6	
本の読み方	6	1	1		
大学で勉強する方法	6	1	2		
レポートの書き方	7	1	1		
英語の学び方	1		1	4	1
発表の仕方	7		2		
岐阜について学ぼう	5			5	1
文献調査の仕方		1	3		

Q2. 授業計画案を現在実施しているセミナーに組み入れることが可能かどうか。

1. 可能：2件

2. 条件付きで可能：2件

条件：

- ・内容・方法については個々の教員ごとの裁量が担保されるのであれば
- ・必要なものはすでにやっているし、取り入れることは可能。そうでないものは不可能。

3. 無理：2件

- ・授業ではなく、教務のガイダンス等で対応すべき内容である

4. その他：2件

- ・質問の意味が不明瞭。下のQ3を見る限りでは、上記の講義内容を一つでも組

み入れることができるなら回答は「可能」で良いのか？ それならばすでに取り入れている場合はどう回答するのか？

- ・ ※「授業計画案」とは何を指すのでしょうか？「講義内容」「授業項目」など表現にばらつきがありますが、要するに「教育内容」に関する事項ですよね？（まとめると、「授業計画の中に、上記項目を含めた講義内容を検討する」？）

Q 3. 可能な場合、授業項目はいくつ位まで組み入れ可能か。

- ・ すでに実施しているものと、取り入れるのが望ましいものは組み入れても良い。
- ・ 全て
- ・ 5～6
- ・ 6個

Q 4. 上記の授業項目案以外にセミナーに取り入れるべき共通性の高い内容。

- ・ メールの送り方
- ・ アルバイト労働における労働者の権利
- ・ 各種ハラスメントやDV問題（特に恋愛関係）について
- ・ 社会活動の意義と危険性について
- ・ 研究調査旅行

Q 5. その他初年次セミナーに関する意見、要望等。

- ・ このアンケートが意図するのは、すべての「初年次セミナーが全く同じ内容で、全学生に公平におこなわれるようにする」というセンター試験的な発想によるものでしょうか？

もしそうだとしたら、大学的ではないし、専門分野も個性も大きく異なる大学教員の資質を全く生かさず、無理やり同じことを強制することで負担を大きくして、教員にも学生にも何も良い影響が無いでしょう。講義内容を全員同一とするように無理強いされた教員が不慣れな内容の講義を行い、モチベーションも上がらなければ、受講生に与える負の影響は計り知れないでしょう。

「教員が全て一律に同じ内容を教える」という授業形式そのものが高校以前の初等教育であり、そのために訓練されたのが小中高校の教員です。大学教員は、それぞれの専門知識を生かしてオリジナリティのある講義をしてこそ、高校まででは学べない「学問」を教えることができますし、そのために教員免許など無しで採用されているはずですが、それにもかかわらず、小中高校の教員と同様なことを大学教員にもやらせようという発想をする人こそが「高大転換」についていけないのではないのでしょうか。このようなアンケートを実施する方々が、まずは大学での学習を身に付けるようにされてはいいかがでしょうか。

- ・ ガイダンスで扱うべき内容と、「授業」として扱うべき内容とを混在しないよ

うにする必要があるかと思えます。

- ・ 学びの方法論については、方法だけを取り出して扱うよりも、具体的な文脈に即して伝えていくことが大事だと思います。
- ・ 学生生活において生じる各種困難・問題性を、うまく教員に相談できるような関係づくりこそが初年次の導入教育では問われているように思います。
- ・ 少人数教育の初年次セミナーを1年通して行うことが望ましい。ただし、地域科学部では、1年前期の初年次セミナーに続き、少人数教育としては、1年後期からは基礎セミナーが1年間にわたって行われ、学年進行に従い、2年後期からは卒論ゼミが始まり、4年で卒業するまで全学年にわたって、少人数教育が実施されており、事実上通年化は4年間にわたり隙間なく実現されているので問題はない。他学部も少人数教育をさらに重視すべきと思われる。
- ・ 初年次セミナーのあり方については、これまで学部（教務委員会や教授会など）で十分かつ必要な検討を重ねてきました。その上で現在のように講座から担当者を出し、各セミナーを運営してきました。全学共通で運営や講義内容を策定したい場合は、学部教務委員長まで問い合わせください。現教務委員長にもこのアンケートの趣旨など説明しておきました。

3) 医学部における調査結果

医学部では、2名の担当者に調査を依頼し、2名より回答を得た（回答率：100%）。以下に回答結果を示す。

Q 1. 現行のセミナーで以下の講義内容を取り入れているかどうか、各講義内容はどの程度の重要度か。

講義内容	現行のセミナーで既に実施している	重要度			
		ぜひ取り入れるべき	取り入れることが望ましい	必ずしも取り入れる必要はない	取り入れる必要は全くない
健康管理について	2	2			
図書館の使い方	1	1		1	
キャンパス・ガイド			1	1	
防災・危機管理について		1	1		
本の読み方		1		1	
大学で勉強する方法	1	1	1		
レポートの書き方	1	1	1		
英語の学び方			2		
発表の仕方	2	2			
岐阜について学ぼう	1	1	1		
文献調査の仕方	1	1		1	

Q 2. 授業計画案を現在実施しているセミナーに組み入れることが可能かどうか。

1. 可能：1件
2. 条件付きで可能：1件
条件：
 - ・集中講義形式
3. 無理：0件
4. その他：
 - 特になし

Q 3. 可能な場合、授業項目はいくつ位まで組み入れ可能か。

- ・ 3～4
- ・ 2項目くらい

Q 4. 上記の授業項目案以外にセミナーに取り入れるべき共通性の高い内容。

- ・ 男女共同参画
- ・ 新システム利用法(操作方法)
- ・ 履修登録の方法
- ・ 連絡方法の確立→ 連絡した内容を確認したことを必ず連絡する

Q 5. その他初年次セミナーに関する意見、要望等。

- ・ 本学科が新たに取り込む「共通性の高い項目」については、機構より講師派遣を願います。

4) 工学部における調査結果

工学部では、6名の担当者に調査を依頼し、5名より回答を得た(回答率：83.3%)。以下に回答結果を示す。

Q 1. 現行のセミナーで以下の講義内容を取り入れているかどうか、各講義内容はどの程度の重要度か。

講義内容	現行のセミナーで既に実施している	重要度			
		ぜひ取り入れるべき	取り入れることが望ましい	必ずしも取り入れる必要はない	取り入れる必要は全くない
健康管理について	5	3	1		
図書館の使い方	5	3	1		
キャンパス・ガイド	1	1	1	2	1
防災・危機管理について	5	3	1		

本の読み方	1	1		4	
大学で勉強する方法	1	1	2	2	
レポートの書き方	1	2	1	2	
英語の学び方				4	1
発表の仕方	2	1	1	2	
岐阜について学ぼう				4	1
文献調査の仕方	1	1	2	2	

Q 2. 授業計画案を現在実施しているセミナーに組み入れることが可能かどうか。

1. 可能：3件

2. 条件付きで可能：1件

条件：

- ・現在の講義内容は全て重要と考えており、特に変更することは考えておりませんが、場合によっては上記の授業計画案の項目と部分的に変更することは可能であると思います。

3. 無理：0件

4. その他：

- ・追加の分については、工学部全体で検討して足並みをそろえる必要があると思います。

Q 3. 可能な場合、授業項目はいくつ位まで組み入れ可能か。

- ・現時点では分かりません。学科での議論が必要です。
- ・現行の3つ（防災、健康、図書館）以外に加えられるとすれば、1つか2つくらいになるのではないかと思います。
他の講義の中でも教えられる「英語の学び方」「発表の仕方」「岐阜について学ぼう」は初年次セミナーの中で実施する必要はないと考えます。「本の読み方」まで教える必要はないかと思います。また、これら、および「文献調査の仕方」は1コマできちんと教えられる内容では到底ありません。90分では表面的で非常に中途半端なものにならざるをえません。「キャンパス・ガイド」については、「講義」と呼べるのでしょうか？ガイダンスで説明すれば良いことです。
- ・現状では「コンピュータリテラシー」にかなりのボリュームがあり、また学科の研究室見学にも2回分の講義日を当てているので、1、2項目しか追加できないと思います。
- ・いくつ組み入れるかが問題なのではありません。組み入れ方が問われるべきです。
- ・大学で勉強する方法、本の読み方、レポートの書き方、文献調査の仕方、発表の仕方、について個別のスキル習得を単発的な目的とするのではなく、学びの土台となる、思考力、発想力、想像力、理解・批判・判断力、整理力、表現力などについて一貫性した教育目的のもとで、15週の中でできるだけ系統的・段

階的に、個人活動、グループ活動・討論を行わせ、失敗や成功の体験を通して深く学ぶ機会を与えることが重要だと思います。

- ・そういった学習の課題や素材としては、例示されたもののほかにも、いろいろなものがあり得ます。

Q 4. 上記の授業項目案以外にセミナーに取り入れるべき共通性の高い内容。

- ・発表の仕方の学習だけでなく、実際にプレゼンテーションを行ってもらおう。
- ・社会で活躍するOBの講演（キャリアパスの学習）。
- ・工学部社会基盤工学科では、初年次セミナーの中で、キャリアデザイン講習を計4回実施し、業界で活躍するOBをお招きしてご講演いただき、グループワークにより卒業後の自身のキャリアを考える機会を設けています。入学したばかりの学生ではありますが、卒業後のビジョンを早期に持つことは重要であると考えます。全学共通で、将来の進路を考えるような同様の取り組みができるのではないかと考えています。
- ・「レポートの書き方」、「発表の仕方」にも関連するかもしれませんが、「コンピュータリテラシー」、つまり、WORD、EXCEL、POWER POINT、画像処理ソフト等の使い方は現代の大学で学ぶ学生にとって重要であると思います。工学部電気電子・情報工学科 電気電子コースでは、初年次セミナーカリキュラムの主体としています。
- ・当コースの初年次セミナーのシラバス「初年次セミナー[工・(C) 電気電子・情報工学科]」を参照されたい。

Q 5. その他初年次セミナーに関する意見、要望等。

- ・図書館ツアーや各種講演の時間、場所などの連絡事項が学部事務や学部教務委員経由で来るためか、初年次セミナー担当のもとへ来るのに時間がかかる場合があります（途中で止まっていることがある）。直接初年次セミナーの担当教員にも連絡していただくと大変有り難いです。また、その様な事項に対する質問の窓口も分かりづらいので、明記していただくと助かります。
- ・学生支援機構は必要以上に内容を縛ることなく、各担当教員グループに効果的な教育を行うための支援をして頂けるとありがたい。

5) 応用生物科学部における調査結果

応用生物科学部では、8名の担当者に調査を依頼し、7名より回答を得た（回答率：87.5%）。以下に回答結果を示す。

Q 1. 現行のセミナーで以下の講義内容を取り入れているかどうか、各講義内容はどの程度の重要度か。

講義内容	現行のセ	重要度
------	------	-----

	ミナーで既に実施している	ぜひ取り入れるべき	取り入れることが望ましい	必ずしも取り入れる必要はない	取り入れる必要は全くない
健康管理について	5	1	3		1
図書館の使い方	6	2	2		1
キャンパス・ガイド	7	3	1	1	
防災・危機管理について	5	1	3	1	
本の読み方			3	1	3
大学で勉強する方法	2	1	4	1	1
レポートの書き方	2	3	2	1	1
英語の学び方		2	3	1	1
発表の仕方	5	1	3	2	1
岐阜について学ぼう	1		3	1	3
文献調査の仕方		2	2		3

Q 2. 授業計画案を現在実施しているセミナーに組み入れることが可能かどうか。

1. 可能：0件

2. 条件付きで可能：4件

条件：

- ・ 時間的余裕が無いので、限られたものについてのみ組入れることはできる。また、できればミニマムリクアイアメントがあれば、偏りの無い授業になるのでは。
- ・ 適当なテキストや指導方針があること。
- ・ 担当している講義の中に盛り込むことは可能である。例えば、今年は「家畜の世界」と題して7回の講義を行ったが、その中で、岐阜県の畜産の特色や畜産加工品を紹介した。これは“岐阜について学ぼう”に該当するのかもしれない。講義テーマに沿った内容であれば、盛り込むことは可能である。

- ・ 担当教員にまかせるのではなく全体で授業をするのであれば問題は無いと思います。

3. 無理：2件

4. その他：

特になし

Q 3. 可能な場合、授業項目はいくつ位まで組み入れ可能か。

- ・ 6から7項目
- ・ 2つ（健康管理、防災）
- ・ いくつでも可

Q 4. 上記の授業項目案以外にセミナーに取り入れるべき共通性の高い内容。

- ・コミュニケーション能力・ディスカッション能力の養成
- ・実際に手を動かして何かをすること。ものづくりなど。

Q 5. その他初年次セミナーに関する意見、要望等。

- ・各担当者が任意に実施しているので、クラスにより偏りが出る。良い面もあれば偏った内容になる危険性もある。授業の要点およびミニマムリクアイアメントを提示してもらえれば、やりやすくなる。
- ・初年次セミナーの講義効果を知りたいです
- ・Q1.の質問項目の中で、健康管理、防災・危機管理、図書館の使い方については初年時セミナーのメニュー（講演会、図書館ツアー）として既に実施されていると思います。また、大学で勉強する方法についてもゲストスピーカーの講演がこれに当てはまると思います。この質問は、既に実施されている内容と重複せずに各教員が実施しているのかあるいは実施すべきかを問う質問でしょうか？
- ・今年度、初めて初年次セミナーを担当したが、当初から本講義に関する情報が少ない。初年次セミナーを行う趣旨が直接アナウンスされなかった（他の担当教員の初年次セミナーのシラバスを見れば何となくわかったが・・・）。成績評価はどうなっているのか？未だにこの疑問は解決できていない・・・。
- ・共通項目は、大学での生活に関わることにとどめるのが良いと思います。あまりそのようなことばかりやると、いっそのことガイダンスで合宿でもすれば良いのでは？と思います。現状の学生には、How to も必要ですが、なぜ勉強しなければならないか、感じ取らせることが重要になっていると感じています。
- ・私自身は（おそらく多くの教員と同じく）教職教育を受けていないため、高大転換教育科目としての目標を達成するために、自身の研究経験、大学での教育経験に基づいて講義を行っている。その際、学年担任や教学委員とはまた違った、接点としての教員を意識している。講義で語られるのは、個人的な興味、関心、経験に偏っているかも知れないが、実感は伴っていると思う。今回、いくつかの授業計画案でテキストに挙げられている教養ブックレット・シリーズはたいへんよくできており、学生が身近に置いて折に触れてページを繰って欲しい読み物である。しかしながら、教職教育を受けていない私がそれらをテキストとして1回1項目の授業計画を淡々と進行しても、教育効果は低いように思われる。教養ブックレットは、単位とは関係なく、岐阜大学生として読んでもらえばよいと思う。

講演による「健康管理」、「防災・危機管理」に関する教育を実のあるものにするためには、その前に、メモを取る習慣を身に付けさせるなど、予め、聴き方を習得させておくのがよい。さもなければ、多くの学生に対して、聞き流すクセをつけさせるだけのように思われる。実にもったいない。

今回の授業計画案を実施して大きな効果が出る学生は、元々学習力が身に

付いた学生だと思われる。今回の授業計画案は、「大学（／大学生／大学生生活）リテラシー」として、教職教育を受けたような教員が適正に実施すれば、一定の効果は得られると思う。単に現在の担当者が担当するのではなく、担当者の再考が必要に感じられる。

6) 全体の集計結果

Q1およびQ2の結果を学部全体で集計し、以下にその結果を示す。全体では40名の担当者に調査を依頼し、34名より回答を得ており、回答率は85.0%であった。

Q1. 現行のセミナーで以下の講義内容を取り入れているかどうか、各講義内容はどの程度の重要度か。

講義内容	現行のセミナーで既に実施している	重要度				① + ②
		① ぜ ひ 取 り 入 れ べき	② 取 り 入 れ る こ と が 望 ま し い	③ 必 ず し も 取 り 入 れ る 必 要 は ない	④ 取 り 入 れ る 必 要 は 全 く ない	
健康管理について	21 (61.8%)	9 (26.5%)	10 (29.4%)	8 (23.5%)	1 (2.9%)	55.9%
図書館の使い方	25 (73.5%)	11 (32.4%)	11 (32.4%)	2 (5.9%)	1 (2.9%)	64.7%
キャンパス・ガイド	12 (35.3%)	5 (14.7%)	7 (20.6%)	13 (38.2%)	3 (8.8%)	35.3%
防災・危機管理について	12 (35.3%)	8 (23.5%)	8 (23.5%)	11 (32.4%)	1 (2.9%)	47.1%
本の読み方	12 (35.3%)	7 (20.6%)	5 (14.7%)	10 (29.4%)	3 (8.8%)	35.3%
大学で勉強する方法	18 (52.9%)	10 (29.4%)	9 (26.5%)	5 (14.7%)	1 (2.9%)	55.9%
レポートの書き方	18 (52.9%)	13 (38.2%)	5 (14.7%)	5 (14.7%)	1 (2.9%)	52.9%
英語の学び方	2 (5.9%)	5 (14.7%)	8 (23.5%)	13 (38.2%)	5 (14.7%)	38.2%
発表の仕方	21 (61.8%)	7 (20.6%)	9 (26.5%)	6 (17.6%)	1 (2.9%)	47.1%
岐阜について学ぼう	10 (29.4%)	2 (5.9%)	8 (23.5%)	16 (47.1%)	6 (17.6%)	29.4%
文献調査の仕方	7 (20.6%)	10 (29.4%)	9 (26.5%)	6 (17.6%)	3 (8.8%)	55.9%

※ 回答人数の下に示した括弧内の数字は、全体の回答者数に対する%を表す。

Q 2. 授業計画案を現在実施しているセミナーに組み入れることが可能かどうか。

1. 可能：9件
2. 条件付きで可能：16件
3. 無理：6件
4. その他：3件

全体の結果を集計した結果、「健康管理について」、「図書館の使い方」、「防災・危機管理について」、「大学で勉強する方法」、「レポートの書き方」、「発表の仕方」および「文献調査の仕方」の項目については、「ぜひ取り入れるべき」または「取り入れることが望ましい」と回答した者が約50%、あるいはそれ以上を超えている。これらの項目のうち、「防災・危機管理について」および「文献調査の仕方」を除いた五項目については、すでにセミナーで取り入れていると回答した割合が50%以上であり、大学1年生で教授すべき重要な内容であることがうかがえる。「防災・危機管理について」および「文献調査の仕方」については、取り入れるべき必要性が比較的高いにもかかわらず、実際に取り入れている割合はそれぞれ35%および20%程度に留まっていた。

一方、「キャンパス・ガイド」、「本の読み方」、「英語の学び方」および「岐阜について」の項目については、取り入れるべきであると回答した者は比較的少なく、また、現行のセミナーで取り入れている割合も低かった。

5. 今後の初年次セミナーのあり方について

学習支援部門・初年次教育担当会議では、平成26年9月に本アンケート調査を実施した後、初年次セミナーのあり方について協議を重ねてきた。その議論の内容を集約し、主なものを以下に挙げる。

1) 初年次セミナーの理念・目的について

本アンケート調査結果では、そもそもこのセミナーの目的や位置づけが不明瞭であるという意見がいくつか出されていた。各学部では、全学共通教育科目となる前から独自の取り組みでセミナーが開講されており、その授業内容が定着しつつあった。おそらく、学部や学科の事情によりセミナーで教授すべき目的や内容が少しずつ異なっていたと考えられる。しかし、全学共通教育科目となる際、必ずしもこのセミナーの目的やあり方について十分な議論がされず、教養教育科目としての位置づけが曖昧になってしまったのではないだろうか。

現在開講されている初年次セミナーのシラバスを精査してみると、学部、あるいは学科の専門教育と思われる内容が教授されているケースも散見される。もちろん、学部や学科により様々な事情があり、その独自性を否定するものではないが、全学共通教育科目は本来、学部・学科の専門領域にとらわれない幅広い教養を身に着けるための科目群である。さらにこの初年次セミナーは、大学での学びに必要な基本的事項を教授する高大転換教育科目としての役割も担っているといえる。これまでの高校における受動的な「学習」から、講義の中で生じた「なぜ？」という疑問点について、学生が自律的に調べ考えることで、自ら“知”を作り上げていく“能動的”な学びこそ、大学で求められる「学修」である。したがって、初年次セミナーの理念としては、高校での受動的な学習から大学での能動的な学修への転換を図るための科目であることが重要であり、初年次教育担当会議ではこの目的を達成するための授業内容が本セミナーに取り入れられるべきであるとの認識に至った。

2) 高大転換教育科目としての授業内容について

高大転換教育科目として初年次セミナーに取り入れるべき授業内容とはどのようなものであろうか。初年次教育担当会議では、すでに各学部において独自の講義内容が定着しつつあること、また、今回の調査において新しい項目を取り入れる必要性や余裕をそれ程感じていないと回答された担当者も比較的多く見られたことから、授業内容を強制的に提案するのではなく、現行の問題点を整理したうえで、「高大転換科目」の位置づけという共通認識のもとに必要な講義内容を提案すべきであろうとの結論に至った。また、他の学部・学科で実施している授業内容については、FDなどで紹介する機会を設け、良い取り組みを積極的に紹介できるような仕組みの必要性も議論された。

昨年度に旧教養教育推進センターにて提案された初年次セミナーの講義内容案（参考資料3）のうち、「図書館の使い方」、「大学で勉強する方法」、「レポートの書き方」および「発表の仕方」については半数以上の担当者がすでに実施しているとの回答を寄せている。特に、「大学で勉強する方法」、「レポートの書き方」、「発表の仕方」については、各学部・

学科において独自の方法により成果を上げる試みがなされている。これらの内容はまさに大学での学びに必要な基本的事項であり、初年次教育担当会議でも「高大転換科目」としてふさわしい内容であると考えている。

「健康管理について」、「キャンパス・ガイド」および「防災・危機管理について」の項目は、重要ではあるが本来入学時のガイダンスで取り上げるべき内容との意見が担当者より出されている。一方、現在のガイダンスに使用できる時間には限りがあり、上述した内容を実施するためには、もう1日ガイダンス日程を増やさなければならない。したがって、これらの項目の実施についてはセミナーで取り入れるべきか、入学時のガイダンスで実施すべきか、今後の検討が必要であり、教育推進・学習支援機構の他部門との協議も必要となるであろう。

初年次教育担当会議では、旧教養教育推進センターにて提案された10項目の講義内容に加え、「文献調査の仕方」を新たに提案し、その必要性について調査した。その結果、取り入れることが望ましい、あるいは是非取り入れるべきと回答した者の数は50%を超えていたものの、実際に取り入れていたのは20%程度であった。現在、初年次セミナーでは“図書館ツアー”として図書館の使用方法を教える項目がほとんどの学部で取り入れられている。しかし、文献検索をはじめ必要な情報を取り出すための十分なスキルを教授するまでには至っていない。したがって、文献検索の方法を含めた図書館ツアーの再構築が必要であろう。また、次年度には図書館に“アカデミック・コモンズ”と呼ばれるスペースが設置される予定であり、学生が自律的に学び合うための場所が整備されることになる。このスペースは、従来の“静かな図書館”とは異なり、学生がグループで課題に取り組み、お互いが議論できるような“活気ある図書館”となることを目指して計画されており、アカデミック・コモンズの使い方についても図書館ツアーに組み入れる必要がある。初年次教育担当会議では、図書館ツアーをより充実すべく、次年度に検討を開始する予定である。

3) その他

その他に初年次教育担当会議で話題に出た内容として、初年次セミナーの成績評価が挙げられる。学部間、担当者間における成績評価のばらつきを減らすことは今後の課題である。

今回の調査では、授業の担当者およびコーディネーターを対象にアンケートを実施した。一方、受講学生がこの授業に対してどの様に感じているのかについてはこれまでに実施されておらず、今後は学生に対する調査アンケートも必要であろう。

6. 参考資料

下記の資料は、2013年度に教養教育推進センターにより企画された第1回FD研究会の開催案内およびFD研究会終了後のアンケート結果を集計したものです。本FD研究会については、「ディアログス」第21号（2014年）に詳細な報告が掲載されています。

資料1

2013年度 第1回FD研究会 大学初年次の共通教育と学修支援

日時 7月31日（水） 13:00～15:00

場所 全学共通教育講義棟 105教室

対象 岐阜大学 教職員・学生、その他どなたでも

趣旨

大学の教育目標に応じた汎用的技能の育成を目的とした少人数セミナーが、多くの大学で全学共通教育科目として開講されています。一方、その授業内容や運用方法は大学によって多様であり、試行錯誤を続けている大学も多いのが現状です。そこで今回のFD研究会では、三重大から講師をお招きし、同大でのスタートアップセミナーおよびピアサポーター制度についてご講演いただきます。また本学の工学部、応用生物科学部より各学部での初年次セミナーの実践について報告いたします。少人数セミナーについて知見を共有しつつ、総合討論を行うことによって、大学の共通教育と初年次の学修支援の在り方について全学的な議論を深めることが本FDのねらいです。

プログラム

13:00 学長挨拶 森 秀樹 学長

13:05 三重大学の初年次教育とピアサポーター養成の取組み
中川 正 氏（三重大学 学長補佐）

13:45 手探りの初年次セミナー：工学部での取組み
青木 正人 氏（工学部 教授）、三宅 恵子 氏（岐阜大学 非常勤講師）

14:05 応用生物科学部における初年次教育の進展
早川 享志 氏（応用生物科学部 教授）

14:20 総合討論
司会：安田 淳一郎（教養教育推進センター 准教授）

主催 教養教育推進センター

E-mail: ysdjun16@gifu-u.ac.jp Tel: 058-293-3097（安田）

FD 研究会アンケート集計結果

◎回答者数 45名

1. 本研究会の満足度はいかがでしたか。

5 (満足)	4	3	2	1 (不満足)
5	29	11	0	0
11%	64%	25%	0%	0%

2. 本研究会で得られた、今後役立つような知見がございましたら、お書き下さい。

- ・三重大の初年次教育はとても参考になった。今後、岐大でもなるべく多くの教育の理解と費用が必要と思われる。
- ・初年次セミナーで行うことは、これから専門としてやっていくことの基礎なのか、能力なのかということについて考える場が得られる。
- ・「入学してきた学生はまじめで好學に燃えた印象がある」その通りだと思います。教える側の問題の方が大きいと思います。昔の学生よりもよっぽどまじめで将来のことを考えている子は多いです。
- ・それぞれの学部における初年次セミナーの取り組みについて、実践報告が参考になりました。また三重大の取り組みについてご報告いただき参考になりました。
- ・他学部と全く初年次セミナーの方法が違って参考になった。
- ・大学にとってどのような位置付けがあり何を学ばせたらいいのか、ぼんやりしていたので先生方の取り組みを伺い少し方向性が見いだせた。
- ・他の学部でどのように行っているのか知ることができた。学生のFD評価でセミナーについての評価をとることも一つと思った。
- ・他学科、他学部の初年次セミナーの情報が得られ、今後の参考になりました。
- ・学科の中での共通したプログラムの実践、その分野に興味を持ってもらうための研究談義
- ・現在の大学生の基礎学力。日本語教育の必要性
- ・先生方が学生に望む素養が分かった。初年次教育の定義が難しいと理解した。
- ・『もし「初年次セミナー」を完璧に実施できたらどうなるのかが依然不明』ということがわかり役立った。つまり依然初年次教育の意義が不明！！
- ・初年次セミナーを行うにあたり、学生のレディネス、どんなことが役に立つのかということを知ることができた。
- ・学生の学内業務への参加の意義（SA等の重要性）
- ・初年次セミナーでプレゼンの方法の教育を行うけれど、FSプレゼンテーションの方法は学生自身が楽しんで行えるし、テーマも興味深くおもしろいと思った。
- ・入学生に対する思考傾向などの問題点は同じだと思った。工学部で行っている評価方法など大変参考になった。大学の教員目標を柱に枠組を考えることが必要だと思った。
- ・他学部で実際行っている初年次セミナーの内容（課題も）
- ・三重大の例は岐阜大学の初年次セミナー改善に役立つヒントが含まれていた。
- ・初年次セミナーに関して、他大学や他学部の色々な取り組みを教えてください参考にな

った。

- ・キャリア・ピアサポーター資格教育プログラムの実践と運営体制ピアサポーター学生委員会阻止の維持
- ・4つの力。キャリア・ピアサポーター資格
- ・「学生に何を教えたかではなく、学生が何を学んだかが大事」という学長のお言葉
- ・教養セミナーというものが何となく何を目指しているのかがわかった。
- ・三重大の事例が参考になった。考え方から実践に向けた方向性が見いだせたように思う。特に学生による授業評価について、学生の成長に関する評価をすることは今後取り入れることができると思う。
- ・三重大の初年次教育とピアサポーター養成の試行については大変興味深く考えさせられました。工学部の発表、プレゼンテーション授業も興味深く聴いた。

3. 本研究会で扱った話題に関して、疑問に残ったことがございましたら、お書きください。

- ・岐大の業務の中で職業訓練を行う場合、1300人分の仕事を設定できるのか不安に思った。
- ・「初年次セミナーWG」が立ち上がると聞いていたが、それはなくなったのか？
- ・初年次セミナーの位置付け、どこにつながり、つながればいいのか？三重大の取り組みが画期的でした。
- ・現状の学生は「無気力」＋「基礎学力の低下」が問題だと思います。今日の初年次セミナーの話はどちらかというと「無気力」の問題に対するものが中心でしたので「基礎学力の低下」にも重点を置いた内容のものがあるべきだと思います。
- ・グループワークの効果があると思うので取り入れていきたい。
- ・教員ひとりが取り組める内容、量に限りがある以上、初年次学生全員にどのくらい均質な教育を提供できるのか。初年次教育として教える内容について、「岐阜大生として望む能力」の意志統一はできるのか？初年次教育においてグループワーキングは有効だが、グループワーキングでは「リーダー」が重要な位置を占める。教員はどこまで「指導」してもよいのか。
- ・学生が身につけた力を数値化できるのか。
- ・「教員の努力（労力）」と「学生への効果」のバランスが不明。初年次セミナーの『実施共通マニュアル』の作成を目指すべきだろう。教員毎の価値観がバラついている限り、混沌状態は続くだろう。
- ・やってみせ、やらせてみせて褒めてやらねば…。何をやるかを選ばせる方法が問題。
- ・プレゼンだけになっている訳ではないが、プレゼンを通して何の能力を期待しているのか？
- ・三重大のスタートアップセミナー31クラスの担当者はどのように決められているのか？
- ・初年次の共通教育をシステムティックに考えていくと、現在の高校教育の問題点と同じ方向に進まないだろうか。
- ・ピアサポーター学生委員会への大学としての支援はどういうものか。

- ・初年次セミナーの位置付け
- ・なぜ初年次セミナーが必要なのが分からなくなった。特に講義内容が教員にまかされているということは、学ばなければいけないことがないからなのではないかと思えた。
- ・「文章作法」というプログラムに興味を持ちました。どんな内容なのですか。それはどのようにしたらみることが出来ますか。
- ・試行錯誤を繰り返し構築されてきている印象があり、このようなことを個人の教員に丸投げしていた岐阜大学のやり方はかなり間違っていたということが理解できた。三宅先生の今後どのように専門教育へつなげていくのかという問題提起はきわめて重い問題であると感じた。
- ・岐阜大学における大学としての初年次教育について学部間で共通認識があるのかどうか疑問に思った。学部毎の取り組み方に大きな違いがあるので今後は学部を超えた取り組みが必要になっているのではないかと思う。
- ・ルーブリックによる評価の管理コスト増加として、具体的事例について知りたいと思った。
- ・PBL、プロブレム、プロジェクトのテーマの選び方が難しいかなと感じまして、社会科学会だともう少し系統的に本を理解したり討論させたいところです。
- ・初年次セミナーの意味をもう一度考え直した方がよい様に思える。

4. 本研究会について、ご意見・ご要望がございましたら、ご自由にお書きください。

- ・岐阜大学の初年次教育を具体的にどのようにするのか、全学的な議論が必要であることが分かった。センター主導か学部主導かどちらで行うのか、どのような方法がより better なのか、現段階ではよく分かりません。教育機構の中で議論を行い、ちゃんとした指針を出して頂きたいと思います。近年のFDの中で、内容が具体的でとても良かったと思います。
- ・それぞれのセミナーにおける評価概念は何か（SABCD をどうやってつけるのか）図書館の使い方、ホケカンの話は現在初年次セミナーの中に入れていますが、初年次セミナーとして扱うのが妥当なのか？ つまり初年次セミナーの主旨に対してこれらの内容はふさわしいのか。内容がもりだくさんで時間配分がむずかしかったように思う。
- ・もうそろそろ中学－高校受験勉強のせいにするのはやめた方がよい。学生の基礎学力不足というが、そんなことはないと思うし、岐大に入れるくらいの学生が基礎力不足としたら、それ以下の他の400－500大学はどうなるのか？工学部の初年次セミナーに関しては、落としどころを決めてないと落ちるのは難しいのではないのでしょうか？特に最後の議題のところは、この3つをはじめからこちら側が決めてからやらないといけないのであって、「どこへつなげていくのか？」といわれてもそれは教える側が落としどころを決めてやるものであって、それを決めずにやればうまくいくはずがないと思う。あと、アンケートに頼りすぎ。一生懸命なのはわかりますが…。
- ・「学生の実情に即す」ことを大事にするためには、できるだけ個別、小規模なレベルでの課題設定が必要ではないか？なぜ「全学で」統一？「学びの基礎」だけでなく、学生生活のサポート、相談の場にもなりうるので、それを非常勤の方に負わせるのは

問題ではないか。能力のベースは統合的なものであり、内部要素の抽出はあくまで「分析」のためのもの。それを取り出し個別的に高めていくことは、結果として能力そのものを解体させかねない危うさがある。(要素還元主義) 「学部を超えた交流」について、学部内での小ユニット(学科・コース等)がある場合とそうでない場合とでは、位置付けが異なる。むしろその部分は、一般の授業で展開すべきことでは？

- ・ 共通科目を専門科目につなげていくために、どんな共通科目で何を目標にして学んでいるのか具体的に知りたいと思います。本日の初年次セミナーの実践報告ももっといろいろ知りたいと思いますので続編も計画して欲しいです。
- ・ 講師の先生方の話をもう少し伺いたかったです。先生方は時間を気にされ、早口で話されていました。聞き取りにくかったです。
- ・ どこも同じようなことをやっていると思った。どう専門教育につなげていくかが課題。
- ・ 共通テーマをもう少ししぼり込んで報告、討議しないと課題が定まらず拡散してしまう。課題についての基調的な報告が最初にあった方が理解しやすいです。
- ・ 各学部での補修教育への取り組みに関するFDを行ってほしい。
- ・ 「学生のため」という視点があるが、学生からの声がない。報告者に学生がいた方がよかった。
- ・ 初年次セミナーで一体どういったことを目標にするのか模索していましたが今日の講演を聞いて学生にとってどんなことが必要なのか少し理解できたのではないかと思います。今後も岐大全体としての取り組みとして取り上げていって頂けたらと思います。
- ・ 初年次セミナーの実施に対して各部局の苦勞と努力が見受けられ参考になった。
- ・ 三重は良くやっている。
- ・ 他の学部では初年次セミナー、どの様に対応されているのでしょうか。何かで公開されても、と思いました。
- ・ 教養教育全体の改革に対する一般教員からのアイデアを吸い上げるしくみが必要ではないでしょうか。
- ・ 特徴のあるプログラムを成功させている他大学の先生を呼んで紹介頂けるのは勉強になります。
- ・ 若手研究者(<40才以下の助教等)のためのFD研究会(世界に通用する自分の研究とは?)
- ・ 生活指導が必要な学生が目立ちます。生活指導は中学や高校で済ませるべきで、20才をすぎた学生さんに対して失礼という気もしています。大学での生活指導をどう考えてどのように対応すればいいか、教えていただけると幸いです。
- ・ 今回初年次セミナーのとりくみを伺い、せっかくよい力を育ててもらっているのに、それを伸ばしきれなかったこと、また教員を養成する科目であったのに表現力を付けてもらう工夫が足らなかったことを実感しました。
- ・ 全体討論の時間が少なかった。学生からの発表や意見もほしかった。
- ・ 今一つ焦点が定まらないFDだった。
- ・ 共通教育の展開のむずかしさ(有効性)について考える機会をもっと作っていただきたい。

- ・ 1987年に教養セミナーを教養部で初めたところに岐阜大にきました。人文社会だと200人単位の授業が多く、少人数でまず大学でどう学んでいけばいいかを知ることが目的だったかと思います。ソフトボール（セミナー間）や軽食をまじえて学部をこえた学生、教員同士の交流の機会となっていたかと思います。

下記の資料は、2013 年度に教養教育推進センターにより企画された第 2 回 FD 研究会の開催案内およびその報告書です。

資料 2

2013 年度 第 2 回 FD 研究会（ワークショップ） 初年次セミナーの共通性を探る

【趣旨と概要】

今年度で開催された F D 研究会「大学初年次の共通教育と学修支援」では、初年次セミナーの目的が「対話力や表現力などの『学習の基礎スキル』の習得」や「学習の動機づけ」に変わりつつある傾向が明らかになった。また、初年次セミナーの改革にあたっては、授業担当者を含む教員集団が協働することの重要性が確認された。一方で、「初年次セミナーの方針や内容について、全学的な共通性が見出されていない」という課題も明らかになった。全学的な共通性を見出せば、共通性の高い教材や設備等を開発することができる。各学部がそれらを共有し、各学部の文脈に取り入れることで、より効果的・効率的な教育を実施できるようになる。

そこで、本ワークショップでは、初年次セミナーの授業担当者でワークに取り組み、初年次セミナーの方針や内容について、全学的に共通性の高い知見を見出すことを目的とする。ワークでは、教養教育推進センターからの共通プログラム案（*付録参照）をもとに、初年次セミナー 15 回分の授業案を作成する。総合討論では、実施方法等についても検討し、学部を超えた連携の可能性についても探る。

【日時】2013 年 10 月 23 日（水）15:00 ～ 17:00

【場所】全学共通教育講義棟 2A 教室

【主催】教養教育推進センター

【対象】2014 年度初年次セミナー担当者、もしくは、初年次セミナーに関心のある方で、各学部から推薦を受けた方

【想定参加人数】15～20 名程度（各学部・学科から 2，3 名の参加を想定）

【主催】教養教育推進センター

【タイムテーブル案】

15：00 趣旨説明

15：05 ワーク 初年次セミナーの共通プログラム開発（グループワーク → 全体発表）

16：10 総合討論 司会：安田 淳一郎（教養教育推進センター 准教授）

【付録】共通プログラム案

下記プログラム案の各項目は、授業担当者が必要に応じて、授業に取り入れることができるものである。教養教育推進センターでは、プログラムの構成に基づいて教材（ブックレット）を開発し、学内教員に配布する予定であるため、どのような項目を入れるべきなのか、各項目でどのような内容を扱うべきなのか、ということについて、多くの教員からご意見をいただきたい。

1. 健康管理について、2. 図書館の使い方、3. キャンパスガイド、4. 防災・危機管理について、5. 大学で勉強する方法、6. 本の読み方、7. レポートの書き方、8. 英語の学び方、9. 発表の仕方、10. 岐阜について学ぼう

「初年次教育の共通性を探る」ワークショップの報告

2013/10/23 安田作成

【日時】2013年10月23日（水）15:00
～17:00

【場所】全学共通教育講義棟 2A 教室

【対象】2014年度初年次セミナー担当者、
もしくは、初年次セミナーに関心のある
方で、各学部から特別な推薦を受けた方

【参加人数】24名

【主催】教養教育推進センター

【概要・目的】初年次セミナーの方針や
内容について、岐阜大学としての共通性

を探ることで、初年次セミナー改善のためのアイデアを共有する。また、各学部の文脈で活用可能な、共通性の高い教材・設備、サービス等を、教養教育推進センターが開発するための知見を得る。

【タイムテーブル】

15:00 趣旨説明

15:15 「仮想的な全学共通初年次セミナーの方針と授業案作成」（グループワーク + 全体報告）

16:30 総合討論

【講師・コーディネータ】安田 淳一郎（教養教育推進センター 准教授）

【報告】今回のFDは従来のFDとは異なり、センタースタッフが初年次セミナー担当者のシラバスに基づいて参加者を企画運営委員に推薦し、企画運営委員が参加者を決定するというプロセスを採用した。これは、従来のように自発的に参加する非常に意欲的な教員だけではなく、FDの場に自発的には出てこなくとも、独自に意欲的な取組を行っている教員同士で意見交換をしてもらうことも有意義であると考えたためである。

グループワークにおいては、「テーマを設定して調査を実施することにより、主体的な学習態度を身につける」ことを念頭においた授業案について、特に高い共通性が見られた。また、授業方法の1つとして、「職業人ロールモデルを提示する」こと、「学生自身に、身につけたい能力や態度について考えさせる」ことについて、特に高い共感が観察された。

アンケートを集計した結果、満足度の平均値は3.7/5.0点であった。自由記載欄には、「初年次の学生にとって何が必要なのか改めて考える機会になった」「学部でのセミナーメニューを決めるための参考になった」「他学部の授業内容を聞いて、自分も実践してみたいと思った」などの記述が見られた。

本ワークショップの意義を高めるためには、今回共有された知見を実際の教育改善に結びつける必要がある。具体的な事項として、初年次セミナーの副読本としてのブックレット開発から始めたい。



下記の資料は、2013年度に教養教育推進センターにより提案された初年次セミナーの授業計画案です。

資料3



■初年次セミナーの意義

高校では与えられたことをこなすことが求められたが、大学では自ら主体的に学習する必要がある。とはいえ、新入生は入学時に、大学での自主的な学習へ転換させなくてはならないという状況に気づけないため、その移行がスムーズに行かないことが多い。したがって、大学での学習に必要な基本的な方法、たとえば、資料の収集方法、文献の読み方、レポートの作成方法などを身につけなければならない。この初年次セミナーは、入学時にそのような戸惑いを感じている学生を支援する目的で行われる。その内容は、おもに学習スキル（ノートの取り方、本の読み方、レポートの書き方、図書館の利用法、プレゼンテーションの方法など）の習得、望ましい学習態度、大学での学習目標の設定、学習の動機づけ、健全な学生生活の構築などの生活面までをフォローする。

■授業計画

1	健康管理について	テキスト：『健康ナビ』 保健管理センターによるレクチャー
2	図書館の使い方	図書館司書、SAによる図書館ツアー
3	キャンパス・ガイド	テキスト：『CAMPUS GUIDE』 大学にある施設、資源を知り、大学生活全般に対して注意を喚起する
4	防災・危機管理について	地震、火事などの災害、その他、緊急事態に対してどのような構えが必要か、について学ぶ
5	大学で勉強する方法	テキスト：教養ブックレット Vol.2『大学で勉強する方法』 大学では具体的にどのように学べばいいのか、について理解を深める
6	本の読み方	テキスト：教養ブックレット Vol.1『人生を決めた書物』 どんな本をどのように読んでいけばいいのか、について学ぶ
7	レポートの書き方	テキスト：『岐阜大学生のための日本語表現練習ノート』 日本語の書く力をつけるとともに、レポートの作製法を学ぶ
8	英語の学び方	テキスト：教養ブックレット Vol.5『大学で「使える」英語を学ぶ方法』 英語の自学自習の方法について学ぶ
9	発表の仕方	調べたこと、学んだこと、主張したいことをどのように効果的に伝えるのか、そのスキルを身につける
10	岐阜について学ぼう	地域、郷土の自然、政治、経済、文化に親しむ
11		
12		
13		
14		
15		

7. おわりに

平成24年度より全学共通教育科目として開講されている初年次セミナーは3年目が経過し、各学部の工夫により充実した講義内容が定着しつつある。しかし、今回の調査において現状における問題点もいくつか指摘されており、今後、初年次セミナーの授業内容について各学部における改善等の検討が進むことを期待している。その際、今回のアンケート調査結果がセミナーをよりよくするための参考になれば幸いである。最後に、アンケート調査にご協力いただいた各学部のセミナー担当者ならびにコーディネーターの先生方に深謝いたします。

学修支援部門・初年次教育担当会議

部門長	加藤 直樹（総合情報メディアセンター）
専任教員	廣内 大輔（教育推進・学修支援部門）
初年次教育担当会議委員長	海野 年弘（応用生物科学部）
初年次教育担当会議委員	根岸 泰子（教育学部）
初年次教育担当会議委員	近藤 真（地域科学部）
初年次教育担当会議委員	竹下 美恵子（医学部）
初年次教育担当会議委員	吉田 豊和（工学部）
初年次教育担当会議委員	今福 輪太郎（医学教育開発研究センター）
事務担当	中島 英雄（学務部教務課）
事務担当	浅井 芳美（学務部教務課）



教育推進・学生支援機構 ORPHESS [オルフェス]
Organization for Promotion of Higher Education and Student Support